

# 古代史のミステリーを探る ― 講演会「北秋田市の古代くみるみたて 胡桃館遺跡の木簡からわかること」

## 新たな発見から推測

## 胡桃館埋没家屋は寺院として使われた？



講師：高橋学氏  
秋田県埋蔵文化財センター・弘田柵跡調査事務所主任学芸主事。古代史をはじめ秋田県の歴史を広く研究されている。



多くの歴史ファンが詰めかけた講演会

市内には、石器時代から中世にいたるさまざまな時代の260カ所の遺跡が発掘されていますが、今から37年前の昭和38年に発掘された胡桃館遺跡（平安時代）は、研究機器などの進歩によって遺物の研究が進み、新たな発見も生まれています。2月25日、遺跡に関する発見と研究成果を紹介する講演会が中央公民館で行われましたのでそのあらましをご紹介します。

千年前の十和田火山の噴火による土石流で埋没した胡桃館遺跡。この講演会は、胡桃館遺跡の木簡に書かれた文字などの最新の研究成果を紹介し、地元の歴史に関心を持ってもらおうと企画されたもので多くの歴史ファンが耳を傾けました。講師は古代史を専門とする秋田県埋蔵文化財センター・弘田柵跡（ほつたのさくあと）調査事務所の高橋学・主任学芸主事。高橋講師は、専門の古代史をはじめ、中世史など秋田県の歴史を幅広く研究され、胡桃館遺跡の木簡についても論文を執筆されています。

胡桃館遺跡は、昭和38年に現在の鷹巣中学校の野球グラウンド整備中に発見された、今から千年前平安時代の遺跡です。

9世紀後半から10世紀初めの家屋とみられ、同時期の十和田火山の噴火による土石流で埋没したものと考えられ、1967年から3年間の発掘調査で、4棟の建物跡や、「寺」と読める墨書土器片などが見つかっています。

昨年3月、専門機関によって37年ぶりに木簡の文字の解読に成功。また昨年3月、文化遺産の総合的な研究を行っている独立行政法人奈良文化財研究所の調査・研究によって、37年ぶりに出土した木簡の文字の解読に成功、人物などの記録が明らかになったことが新聞等でも紹介されましたので、覚えていられる方も多くいらっしゃると思います。木簡は、専門の研究機関で赤外線テレビ

平安時代の建物の遺材が現在まで保存されている全国でもまれな遺跡

胡桃館遺跡とは？

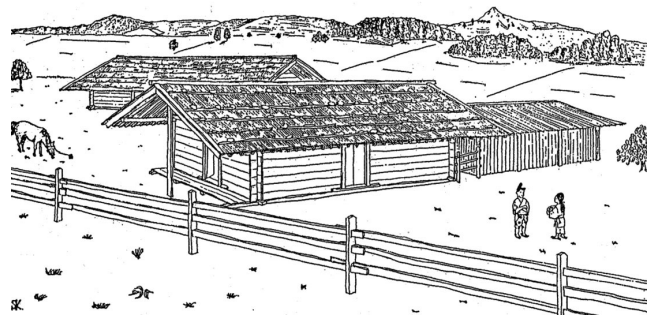
胡桃館遺跡は、現在の鷹巣中学校のグラウンド整備中に発見された、今から千年前（平安時代）の遺跡です。1967年から3年間にわたり秋田県教育委員会と当時の鷹巣町教育委員会によって発掘が行われました。当時の発見を憶えている方も多いと思いますが、平安時代の建物がそのままの形で出土したことで有名になりました。

なぜ残ったのか？

普通、建物の柱や板などの木材は地中に埋まっていると腐ってしまいます。なぜ当時の建物が残っているのでしょうか？ その理由は十和田火山の噴火にあります。現在の十和田湖は約千年前（一説によると915年）に噴火しました。その噴火の規模は有史以来の日本最大級のものと言われています。

北秋田市には火山灰はあまり降らなかったようですが、大量の土石流（シラス洪水）が

胡桃館遺跡の復元想像図（奈良国立文化財研究所の研究者によるもの）



カメラなどを使い解析した結果、「物名張」「米一升」などの文字が判読でき、米を支給した際の数量や、支給を受けた人物の名前を記した帳簿であることが分かりました。

古文書の気象現象の記録から推測する十和田火山の噴火時期

このような調査結果などをもとに高橋氏は、「北秋田市には、国指定史跡になった伊勢堂遺跡ばかりでなく重要な遺跡がいくつもある。胡桃館遺跡もその一つ。十和田火山の大噴火による土石流で埋もれてしまったことはわかっているが、噴火が何時起きたのか、これまではつきりわかっていなかった。しかし、平安時代に書かれた比叡山延暦寺の僧侶の記録『扶桑略記』に記された気象現象の記録などから、延喜15年（西暦915年）7月5日（現在のこよみに直すと8月18日）と考えるのが妥当」と、大噴火の時期を紹介、歴史のロマンをかきたてます。

寺院として使われた可能性も。10世紀初頭にはすでに仏教が浸透？

そして、「埋もれた遺材の観音開きの扉に書かれていた墨書が3日間にわたる経典読誦の記録であることや、『寺』と書かれた墨書土器があることから、建物は寺院として機能していたことになり、この遺跡全体を理解する上でも重要な意味をもつ」と、10世紀初頭にはこの地方にも仏教が浸透し、法会（ほうえ）僧侶を集めて仏の教えを説き聞かせる会合）が行なわれていたという新事実が明らかになっていることを紹介しました。

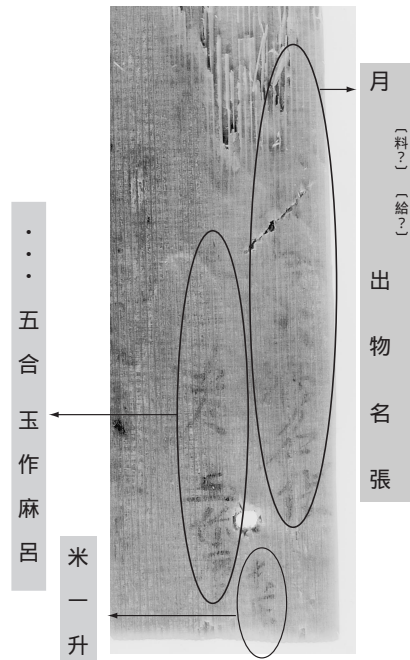
胡桃館遺跡の埋没家屋は、これまで豪族の屋敷、あるいは役所として使われたのではないかと言われていただけに、「寺院として使われていた可能性がある」との解釈を聴き、参加者は、胡桃館遺跡の謎と地方史の奥深さにさらに関心を高めていた様子でした。

米代川を流れ、流域の村々を飲み込んでしまいました。火山灰を含んだ土に埋もれたことで腐らずに残ったようです。よほど被害が大きかったのか、その様子は「八郎太郎伝説」として現在まで語り継がれています。

どんな人が住んでいたのでしょうか

平安時代、この地域の人々は『蝦夷（えみし）』と呼ばれていて、天皇の支配が及んでいない土地でした。そのような地域に、胡桃館のような高度な建築技術で建物がみつかったり、遺跡からは「寺」と読める文字を書いた土器や、お経を読んだという記録の落書きがみつかっています。ということからもこの地域を治めるような人物が住んでいたのではないのでしょうか。

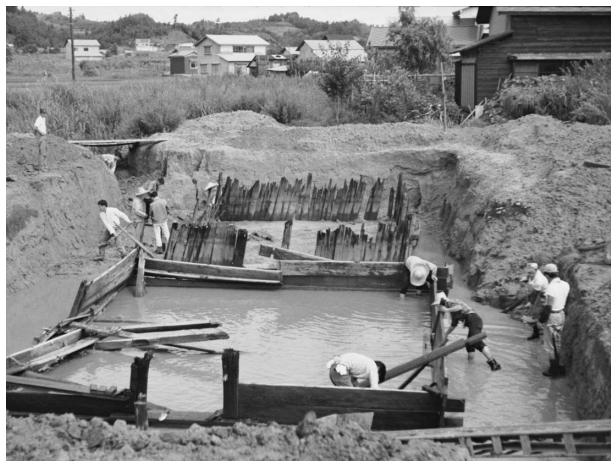
（市教育委員会主任学芸員・榎本剛治）



出土した木簡の一部。書かれた文字から米の支給帳簿ではないかと推測されている。（赤外線デジタル写真）



出土した埋没家屋の遺材の一部。保存状態がよく、その後の文字発見にもつながった。（市文化会館資料展示室）



講演で紹介された発掘当時の写真（実物はカラー）。板壁を井桁に組んだ校倉（あぜくら）造りになっているようすがよくわかる。